

墨運堂

日本ならではの墨に挑む。
墨ひと筋200年の工房

←圧縮し、少し寝かせた墨を型入れの木型から取り出す。木型は全部で6つの部位に分かれる。この段階では、墨はまだ軟らかい。



奈良、唐招提寺にほど近い近鉄西ノ京駅の裏手。ここに日本の墨を作り続けて200年の歴史をもつ『墨運堂』の固形墨の工房がある。ほのかな墨の香りが辺りを包む。

素足を墨色に染めた型入れ師が、鉄棒に掴まりながら黒々とした粘土状の塊を力一杯踏む。練り込みと呼ばれる作業である。案内してくれたのは、工程に詳しい企画課

の野口信二さん（66歳）だ。

「煤と膠を混ぜた物に、香料を加えて練ります。足で踏んで中の空気を出すのです。次が型入れです」練り上げた墨は、小さな塊に量り分け、手で延ばしてさらに空気を除く。適当な大きさの棒状にして、木型に押し込んだ後、製品の刻印の入った蓋を押し当て、しばらく圧縮する。すべてが手作業である。一日に行なう型入れは、ひとりで約800丁にも及ぶそうだ。圧縮した墨は木型のまま30分ほど寝かせ、適度に乾いたら鋏で周りを切り取り、空気に触れさせない「灰乾燥」へ。その後、数か月、自然乾燥させ、重さが約6割に減った出荷準備完了となる。

「墨作りは10月から5月が適しています。暑すぎると膠が腐敗しやすくなるのです」と野口さん。墨を固めるゲル化を促すためにも、低温であることが大切だという。

墨の良し悪しは膠で決まる

「墨は膠の状態によって変わり、翌日は、同じ物ではできません。墨

の色は重視しても、膠のことを気にする人はあまりいません。でも、墨の良し悪しは膠で決まるといっても過言ではない。膠が命です」

こう語るのは、墨の研究と開発に情熱を傾けてきた『墨運堂』の9代目で会長の松井重憲さん（74歳）だ。50歳で膠の勉強を始め、いい膠にはコラーゲンが不可欠という結論に至り、今では墨専用の膠研究所を持つまでになった。こうした研究が、近年の高品質の固形墨を支えているのである。

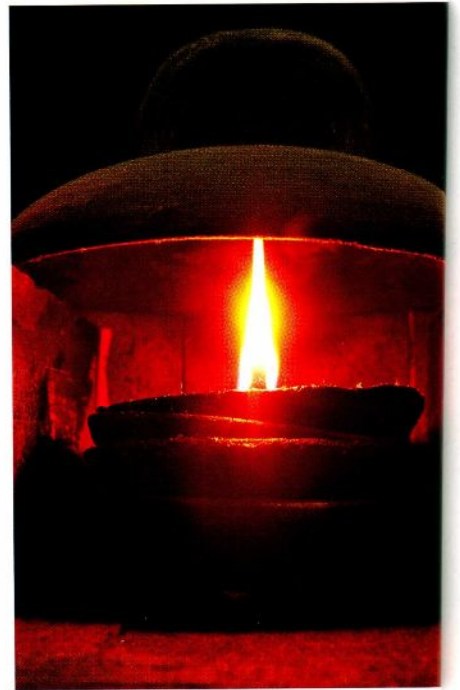
江戸末期には約70軒あった奈良の墨の製造元は5軒ほどになった。「5軒の墨屋が残れば研究した膠が活きる。各々、培った技術がありますから5種類の墨ができます。互いに競争するより、膠の研究を公開して墨の文化を守るべきだと私は思っています」（松井さん）

ひとりの職人が一日に800丁作る。それが使い手800人に渡ると、800通りの墨になるという。そして、墨の状態は毎日変化する。墨は、無限の色と使い心地をもっているのだ。

※1：墨には油煙墨と松煙墨があり、油煙墨は、油を燃やした煤を原料とする。 ※2：煤100に対しての膠の量。以下同じ。



← 空気を絶ち、灰を被せて湿気を取る。灰乾燥を終えた墨は、数か月自然乾燥させる。元の約6割の重さになったら、磨き、鉛を彩色する。



← 『墨運堂』の墨の外見は華やかでない。墨はすり減らしてこそ良さがわかるとの信念の表れだ。左から、「ともしび」膠量45(※2)、0.7丁型 2940円、「玉芙蓉」膠量50、1.0丁型 1260円、「天爵」膠量60、2.0丁型 6300円。

↑ 菜種油を灯芯釜に入れて燃やし、上皿の下にこびりついた煤を羽根で払い落とす。この煤が油煙墨(※1)の材料になる。

↑ 写真上／右から菜種油、油煙煤、龍腦(古来、墨に練り込まれてきた高価な香料)。写真下は、動物の骨や皮から煮出した膠。



↑ 固形墨への愛着が強い松井重憲さんは、「どんな小さな墨も捨てられない。分身のようなもの」と語り、自社墨の欠点を探すため日々試し書きを続ける。



↑ 練り込み作業。「まだ11年目です」という型入れ師・松田英治さん(38歳)の足に力が入る。上質な墨を作るために大切な工程だ。



↑ 練り込みを終えた墨は、天秤で量り分け、手でこねて木枠に収める。その後、ネジと呼ばれるプレス機でしばらく圧縮する。



↑ 近鉄橋原線西ノ京駅より徒歩約5分。『墨運堂』の敷地内に『墨の資料館』がある。付録地図あB1

「墨運堂」の敷地には「墨の資料館」があり、10月上旬から5月上旬までの間、固形墨の型入れを間近で見学できる。2階には製墨の写真資料の展示が、3階には様々な墨や著名作家の書画作品がある。できたての墨を握る「握り墨」を体験し、それを購入することも可能(3150円)。「墨の資料館」は入場無料。開館は10時～17時。要予約。他に墨を試し書きできる施設も併設されている。(住奈良市六条1・5・35) 0742・52・0310(墨運堂)

製墨の全工程を学べる
『墨の資料館』を見学